

人間関係とポライトネス

東京外国語大学 宇佐美まゆみ

1. はじめに

ブラウンとレビンソン（以降、B&L）のポライトネス理論（Brown & Levinson, 1987）が、日本における関連の学界で言及されるようになってから久しい。しかし、この理論が扱う対象や分野があまりに多岐にわたることもあり、未だその理解や解釈が一定しているとは言い難いのが現状である（宇佐美、2008b）。また、一般に概説・紹介されている部分は、B&L のポライトネス理論の基本骨格のみにとどまっているが、実は、B&L の「ポライトネス」の原著では、それ以外にも、「社会学的示唆」、「言語研究への示唆」などの章が立てられ、その中で、言語の通時的変化のメカニズムの一般原則などについての B&L の見解が、かなり大胆に開陳されている。それは、「人間関係の日本語史」を考える際にも、検証すべき捉え方の一つとして、実際のデータにあてはめて分析や解釈を試みる価値のあるものである。

本発表では、今後、「人間関係の日本語史」なるものを、実際の言語資料に基づきながら解き明かしていく際に、過去から現在にわたる言語資料という実際のデータ群の隙間を埋めていくための一つの有効な理論的枠組みとして、B&L のポライトネス理論の基本的骨格とその人間社会の捉え方を紹介する。その上で、B&L の理論とそれを発展させたディスコース・ポライトネス理論（宇佐美、2002 等）の中の概念の一部を用いて、人間関係と「対人配慮行動」としてのポライトネスのタイプの関係について考えたい。そして、ポライトネス理論研究と、現代、及び、過去の一定の社会集団における言語行動・非言語行動の記述研究、その通時的研究、さらには、地域差をはじめとする言語行動・非言語行動の共時的変種の記述研究の有機的協働を実践していくための一つの可能性を示したい。

本稿には、シンポジウム当日の議論の際に、専門以外の方にも用語や概念が、少しでもわかりやすくなるように、B&L のポライトネス理論の骨格・鍵概念と、ディスコース・ポライトネス理論（宇佐美）の関連部を示しておく。当日は、できれば、これらの概念を用いて、人間関係の形態と「対人配慮行動」としてのポライトネスのあり方の関係、その通時的変化や地域差、言語差、及び、それらの理論的捉え方と研究方法論に触れられればと考えている。

2. ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の骨格

説明・議論等の都合上、以下に、B&L のポライトネス理論を構成する 4 側面の基本事項¹をまとめておく。

2.1 人間の基本的欲求としての二種類の「フェイス」

B&L のポライトネス理論では、「ポライトネス」は、「人間関係を円滑にするための言語ストラテジー」と定義されており、日本語で言う「丁寧さ」とも、英語の一般的意味での“politeness”とも専門用語としての意味は異なる。むしろ、「対人配慮行動」というのが、最も適当であろう。B&L は、人間には、人とのかかわりあいに関して、二つの「基本的欲求」があるとする。他者に近づきたい、理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという「プラス方向への欲求（親近欲求）」としての「ポジティブ・フェイス(positive face)」と、他者にむやみに立ち入られたくないという「マイナス方向に関わる欲求(不可侵欲求)」

としての「ネガティブ・フェイス(negative face)」である。つまり、他人に対して、「近づいて仲よくなりたいという欲求」と、「ある程度は距離を置きたいという欲求」である。「ネガティブ」とは、「否定的な」という意味でも、「消極的な」という意味でもない。B&Lは、この人間の基本的欲求としての二種類のフェイスを脅かさないように配慮することを「ポライトネス」と操作的に定義して捉え、それぞれ、ポジティブ・フェイスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼んだ。

このようなポライトネスの捉え方が斬新であるのは、その場をなごませる冗談を言うことや、仲間意識を表すことになる仲間うちの言葉を用いることも、人間関係を円滑にするためのストラテジーとして機能しているということを前面に打ち出す「ポジティブ・ポライトネス」という概念を導入した点である。相手を間違えなければ、「タメ口」も「ポジティブ・ポライトネス」なのである。また、安易な類型化は避けなければならないが、世界の言語文化には、大まかに、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが好まれる文化と、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが好まれる文化があるとされ、アメリカが前者の典型、そして、イギリス、日本が、後者の典型とされている。

2.2 フェイス侵害度見積もりの公式

本シンポジウムで言う「人間関係の測り方」の原則に相当するものとして、B&Lは、以下のような公式を提示している。対人配慮行動としてのポライトネスは、ある発話行為xの「フェイス侵害度(相手のフェイスを脅かす度合い)」に応じて規定されるとする。具体的に数量化できるわけではないが、この「フェイス侵害度」は、三つの要素によって規定されるとして、以下のように公式化している。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

Wx: 「行為(x)のフェイス侵害度」

D: 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P: 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx: 特定の文化においてある行為(x)が「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み(absolute ranking of impositions)」

つまり、ある行為xの「フェイス侵害度(Wx)」は、xという行為(例えば、旅行先で特定のものを購入してもらうよう依頼する)が、ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけると見なされているかという「相手にかける負荷度(Rx)」と、話し手と聞き手の「社会的距離(D)」(対称的)、聞き手の話し手に対する「相対的力(P)」(非対称的)の三要素が加算的に働いて決まってくるとする。また、xという行為が相手にかける負荷度(R)は、文化によって異なるとしている。この、「同じ行為であっても、それが相手にかける「負荷度」は、文化によって異なる」ということが、この公式に組み込まれていることは、改めて強調しておきたい。

2.3 ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する情況

B&Lは、「具体的なポライトネス・ストラテジー²」として、①直接的表現、②ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、③ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、④オフ・

レコード・ストラテジー、⑤フェイス侵害行為を行わない、の5つを挙げている。その上で、「ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する情況」を以下の図1のように示し、人が、ある言語行動を行う際には、その行動のフェイス侵害度の見積もりの値の大きさに応じて、それに見あったストラテジーが選択されると予測している。

- ① フェイス侵害度の軽減行為を行わず、直接的な言語行動をとる。(without redressive action, baldly)
- ② ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー (positive politeness strategy)
- ③ ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (negative politeness strategy)
- ④ オフ・レコード・ストラテジー(伝達意図を明示的に表さない。ほのめかす)。(off record strategy)
- ⑤ フェイス侵害行為を行わない。(doing no FTA)

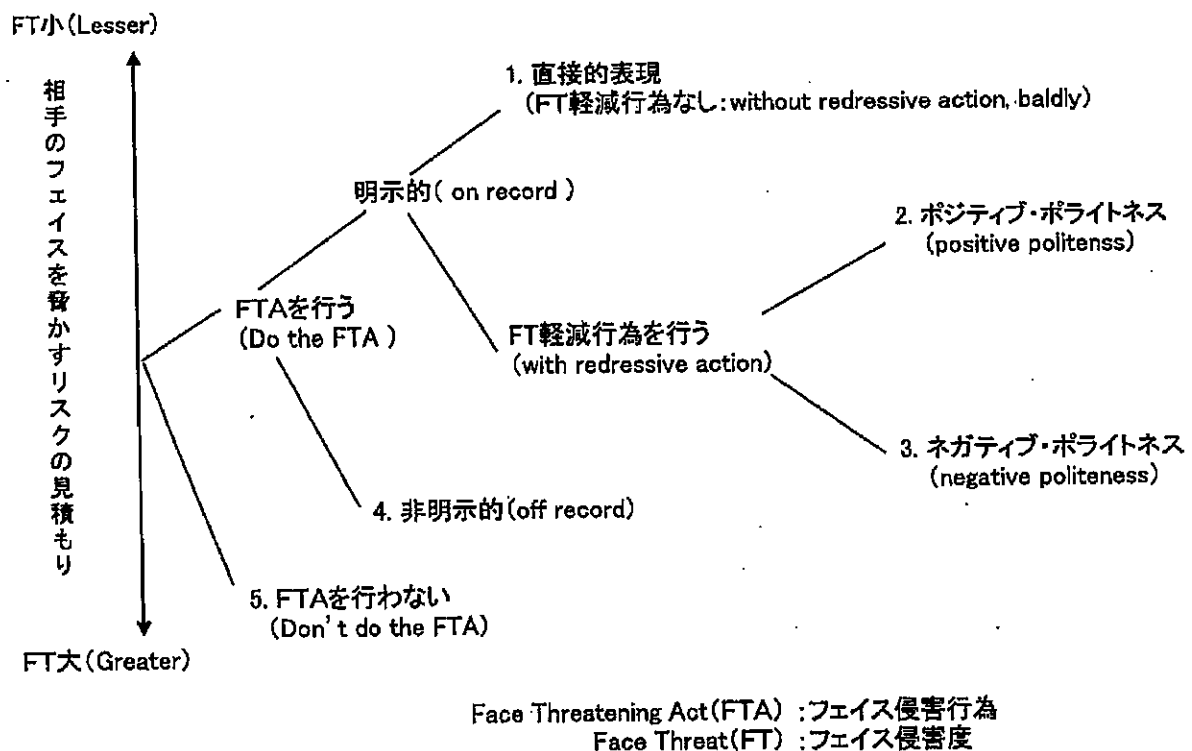


図1 ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する情況

(from Brown & Levinson(1987)60:一部簡略化。訳は筆者)

この図の意味するところは、人は、相手のフェイスを脅かすリスクの見積もりに応じて、フェイス侵害度が極端に高い場合は、「その行為自体を行わない」というストラテジーが選択されやすいとする。フェイス侵害行為(FTA)を行わざるを得ない場合は、何らかの「フェイス侵害度軽減行為」を行うか行わないか、伝達意図を明示するかしないかが選択される。フェイス侵害度が小さいと見積もられた場合は、フェイス侵害度軽減行為を行わず、例えば、「このペン借りるよ」などの「直接的な表現(bald on record)」が選択される。フェイス侵害度がもう少し大きいと見積もられた場合、何らかの「フェイス侵害度軽減行為(redressive action)」を行うことが選択されるが、フェイス侵害度軽減行為には、「ポジ

ティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」、「オフ・レコード」の3種類がある。先の直接的表現「このペン借りるよ」を、「このペン書きやすそうだね。貸してね」くらいにすると、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーになり、「悪いけど、このペン貸してくれる？」と言うと、ネガティブ・ポライトネスになる。オフ・レコード・ストラテジー（off record）とは、「あ、ペン忘れちゃった」のように、借りたい意図を明示的に表現しないストラテジーを指す。

彼らのこの図は、フェイス侵害度が極端に高い場合は、「その行為自体を行わない」というストラテジーが選択されやすく、フェイス侵害度が比較的高い場合は、オフ・レコード・ストラテジーが選択されやすく、フェイス侵害度が小さくなるにつれ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、この順に選択されやすい傾向にあることを示している。そして、フェイス侵害度が最も低く見積もられた場合は、フェイス侵害度軽減行為を行わない直接的表現が選択される傾向にあることを示している。一般にはあまりなじみのないポジティブ・ポライトネス・ストラテジーは、「ある行為のフェイス侵害度」が比較的低く見積もられ、しかし、ある程度のフェイス侵害度軽減行為が行われる場合に用いられやすくなると予想されている。

2.4 具体的なポライトネス・ストラテジー

上で述べた3種類のポライトネス・ストラテジーについては、B&Lは、以下のような具体的な主要ストラテジーをあげ、それぞれいくつかの言語における例を示しながら、分析や解釈をしている。ここでは十分な紙幅がないが、当日の議論の際に参照できるように以下にそれぞれの主要ストラテジーを列挙しておく。

<ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー> (15)

- ① 聞き手Hに注目・注意する（関心・欲求・必要性・所有物）
- ② 誇張する（聞き手Hへの関心・是認・共感）
- ③ 聞き手Hへの関心を強調する
- ④ 集団内アイデンティティ・マーカーを使用する
- ⑤ 一致点を探す
- ⑥ 不一致を避ける
- ⑦ 共通の基盤を含意したり、持ち出したり、主張したりする
- ⑧ 冗談を言う
- ⑨ 聞き手Hの欲求を理解し、配慮しているということを前提としたり、主張したりする
- ⑩ 申し出る、約束する
- ⑪ 楽観的になる
- ⑫ 話し手Sと聞き手H両方を活動に巻き込む
- ⑬ 理由を挙げる、尋ねる
- ⑭ お互い様だということを仮定／断定する
- ⑮ 聞き手に何かを提供する（物、同情、理解、協力等）

<ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー> (10)

- ① 慣用的間接表現を使う
- ② 質問やヘッジ表現を使う

- ③ 悲観的になる
- ④ 相手への負荷度 Rx の値を最小限にする
- ⑤ 敬意を払う
- ⑥ 謝罪する
- ⑦ 話し手 S と聞き手 H を非人称化・非人格化・非個人化する
- ⑧ フェイス侵害行為 FTA を一般的規則として述べる
- ⑨ 名詞化する
- ⑩ 自分が借りを負うような、或いは、聞き手に借りを負わせないような直接的な言い方をする

<オフ・レコード・ストラテジー> (15)

- ① ヒントを与える
- ② 連想の手がかりを与える
- ③ (何かを) 前提とする、含意する
- ④ 控えめに言う
- ⑤ おおげさに言う
- ⑥ トートロジーを使う
- ⑦ 矛盾した表現を使う
- ⑧ 皮肉を言う
- ⑨ 比喩(メタファー)を使う
- ⑩ 修辭疑問を使う
- ⑪ 多義的な表現を使う
- ⑫ 対象をはっきりしない曖昧な言い方をする
- ⑬ 過剰一般化を行う
- ⑭ 聞き手 H を(他の人などに)置き換える
- ⑮ 中途終了型発話や省略を使う

3. 対人配慮行動としてのポライトネスの普遍性と個別性

B&L は、上記 2. 1～2. 4 で示した 4 つの側面から成るポライトネスの普遍的原則が、多様な文化における相互作用の質の違いを説明するための基礎をも提供できるとし、その基礎として、以下の 2 つをあげている。

- ① このスキーマ (P、D、R の公式) 自体の中にあるパラメータと変数
- ② 社会集団ごとに異なる多様なポライトネス・ストラテジーの分布の違い

先の 2. 1 で触れたように、B&L のポライトネス理論における「ポライトネス」という観点から人間社会を見ると、安易な類型化は避けなければならないが、大きくは、ポジティブ・ポライトネス文化と、ネガティブ・ポライトネス文化に分けることができる。そのため、日本語の言語行動も、一つの切り口として、この 2 つのポライトネス・タイプの観点から分類して分析してみることができるだろう。日本文化は、国レベルでは、ネガティブ・ポライトネス文化の典型と言われているが、当然、日本文化の中にも地域差や集団差がある。直感的ではあるが、日本の中では、大阪は、典型的な「ポジティブ・ポライトネス文化」と言え、東京の山の手文化、或いは、異なる地域から上京してきた人々の割合が高い「都市型文化」や「共通語文化」は、「ネガティブ・ポライトネス文化」を形成していると捉えることができるだろう。一方、東京でも、「下町文化」は、ポジティブ・ポライト

ネス的だと捉えられる。都市とは違って、成員同士が顔見知りでお互いの交流が比較的密な、いわゆる村社会では、「ポジティブ・ポライトネス型文化」が多いように思われる。

しかし、それでは、このような違いは、どのようにして生まれ、形成されてきたのだろうか。以下には、B&Lの捉え方の一部を示しておく。

4. 人間関係とポライトネス・ストラテジーのタイプ

B&Lは、エトスを、特定の社会における人々の社会的カテゴリーや社会集団を特徴づける「相互作用の質 (interactional quality)」として位置づけ、基本的に、人間関係における「力関係」を表すP値と「距離」を表すD値とによって評定される社会的関係は、文化に特有であるとしている。大まかには、一般的にP値が高く見積もられ、地位の差異化が強調されている文化(ネガティブ・ポライトネス文化)か、逆に、P値が低く見積もられ、平等主義的な関係が強調されている文化(ポジティブ・ポライトネス文化)かに分かれる。P値とD値の見積もりは、 Wx の値を決定するので、ポライトネス・ストラテジーの選択にも影響する。よって、特定の文化における成員が、特に公の場において選択する傾向にあるポライトネス・ストラテジーのタイプは、ある程度一般化することができるとする。

B&Lは、人間の社会・文化は、その成員によって、一般的に、P値、D値がどのように捉えられているかによって、4つのダイアッドのタイプに分けることができるとして、次頁の図2を提示している。「高P値・低D値」の関係と、「高P値・高D値」の関係は、後者では、聞き手Hが、Sに対して、より多く「フェイス侵害度軽減行為」を行うということが予想できるが、基本的には同様の非対称的な関係になるとして、ダイアッドIのタイプとして、まとめて提示されている。ダイアッドI～IIIの通時的変化については、B&Lでは特に触れられていないが、日本語の言語使用を考えると、ダイアッドIを経て、ダイアッドIIに変化し、現在は、さらにダイアッドIIIへと変化しつつあるように見える。ただし、すべての言語文化がこの経緯を踏むとは限らないだろう。様々な言語の通時の研究が望まれるところである。

5. 人間関係の日本語史の研究のために一方法と解釈

最後に、対人配慮行動としてのポライトネスの理論的枠組みを用いて、人間関係の日本語史を研究するための方法と解釈について考える。

5.1 一定の社会集団におけるP値・D値の評定と、好まれるポライトネス・ストラテジー

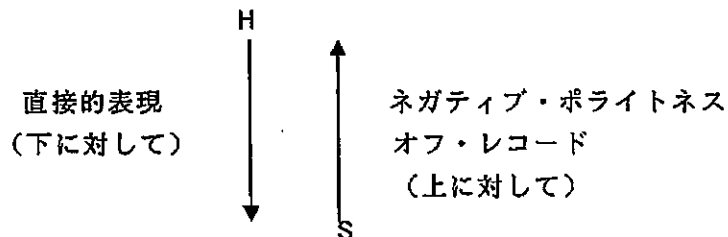
現代、及び、過去の一定の社会集団における言語行動・非言語行動の記述、それらの通時的研究、さらには、地域差をはじめとする共時的変種の記述を、当該の集団において、一般的に、P値、D値がどのように評定されていたかを考慮しながら、抽出された具体的言語表現や言語行動、非言語行動に、どのようなポライトネス・ストラテジーが多いかを分析したり、逆に、抽出された言語行動や非言語行動のポライトネス・ストラテジーのタイプの分布から、当該の集団のP値、D値の見積もられ方を推測することによって、当該の社会集団が、図2に表されたどのタイプの人間関係を持つダイアッドに相当するかを推論・解釈することなどができよう。それらは、異なる時代の言語行動・非言語行動の通時的観点の研究にも、地域差、言語差などの共時的変種の記述研究の体系化にも、寄与できる点は、多々あるのではないだろうか。

ダイアッド I: (ex. インド)

高 P 値・低 D 値関係

(H は S に対する P 値が高く、S と H の D 値は低い)

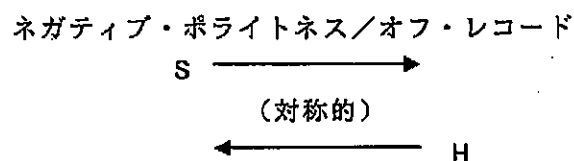
(高 P 値・高 D 値関係: H は S に対する P 値が高く、S と H の D 値も高い) では、H が、フェイス侵害度軽減行為をより多く行うが、基本的に同様のダイアッドとみなす)



ダイアッド II: (ex. 日本、マダガスカル、英国)

高 D 値・低 P 値関係

(H は S に対して、P 値はほとんどないか低く、S と H の D 値は高い)



ダイアッド III: (ex. アメリカ西海岸)

低 D 値・低 P 値関係

(H は S に対して、P 値はほとんどないか低く、S と H の D 値も低い)

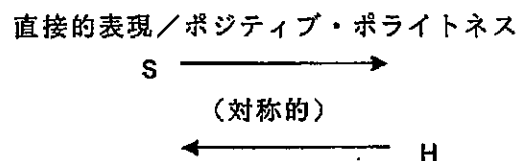


図2 ポライトネス・ストラテジーの分布のパターン

(Brown & Levinson, 1987: p. 250 より一部改変・追加、訳・説明は筆者)

5. 2 無標ポライトネスとしての「基本状態」の同定

ここでは、簡単にディスコース・ポライトネス理論 (宇佐美、2002, 2003, 2008a) における「基本状態 (default)」という概念を紹介し、人間関係の日本語史の一つの研究方法におけるこの概念の位置づけに触れておきたい。

「基本状態」には、以下の2種類がある。1つは、「特定の『活動の型』における談話の『典型的な状態』」を指し、「談話の基本状態」と呼ぶ。また、もう1つは、「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』」を指し、「談話要素の基本状態」と呼ぶ。前者は、理論的観点から想定するもので、談話内の諸要素を実証的に特定できなくてもやむをえない。後者の「談話要素の基本状態」とは、個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するものである。例えば、数多くの同じ活動の型の中の「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動

の平均的な構成比率(分布)、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」などがある。

より具体的に言うと、「ある活動の型の談話における重要要素の構成比率の基本状態」とは、例えば、成人の初対面二者間会話では、スピーチレベルの構成比率が、敬体6：常体1：スピーチレベルのマーカークなし3であるのが基本状態であるというような捉え方を言う。「談話内の『特定の要素』の基本状態」とは、スピーチレベルという要素を例にとると、成人の初対面二者間会話においては、「敬体(特定の要素)の使用率が約6割であるのが基本状態である」というような捉え方である。「談話の展開パターンの基本状態」とは、「依頼会話」において、注意喚起→見込みの確認→補助ストラテジー→依頼発話という展開になるのが「基本状態(データの50%を超える典型)」であるというような捉え方である。

これらの「基本状態」を一般化するには、厳密には、数多くのデータを分析し、同定していく必要があるが、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みで行う個々の実証研究においては、「基本状態」を一般化すること自体が目的ではなく、当該データで同定した「基本状態」を作業仮説として扱い、その「基本状態」が、当該の社会集団の言語行動の「無標ポライトネス」であると想定することによって、当該の言語行動の「基本状態からの離脱」としての「有標行動」の「ポライトネス効果」を、「その有標性の度合いについての話し手と聞き手の見積もり差」から、相対的なものとして同定していくことができる。しかし、いくつかの社会集団における特定の言語行動・非言語行動の「基本状態」の違いを明らかにしていくことは、対人配慮行動のバリエーションの研究にもなりうる。紙幅が尽きてしまったが、これらの概念を用いて、対人配慮行動の通時的変化や、共時的バリエーションを分析しても興味深いのではないかと考えている。

【引用文献】

- Brown, P. & Levinson, S. C. 1987 Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開(1-12)」『月刊言語』31(1-5、7-13)、大修館書店。
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス-ディスコース・ポライトネス理論の観点から-」『国語学』54(3): 117-132.
- 宇佐美まゆみ(2008a)「相互作用と学習-ディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』、ひつじ書房:150-181.
- 宇佐美まゆみ(2008b)「ポライトネス理論研究のフロンティア-ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11(1)(特集「敬語研究のフロンティア」)、社会言語科学会:4-22.

¹ B&Lのポライトネス理論の基本的骨格は、以下の4つの側面から構成されている(宇佐美、2002、2003、2008a等参照)。①人間の基本的欲求としての「フェイス」という鍵概念、②フェイス侵害度見積もりの公式、③ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する状況、④具体的なポライトネス・ストラテジー

² 以降、冗長を避けるため、「ポライトネス・ストラテジー」を、単に「ストラテジー」と呼んだり、「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」、「オフ・レコード・ストラテジー」などを、それぞれ「ポジティブ・ポライトネス」、「ネガティブ・ポライトネス」、「オフ・レコード」と呼ぶこともあるので注意されたい。